

石川

ISHIKAWA PREFECTURAL
MUSEUM OF HISTORY

れきはく

No.155

2026.7.8

令和8年度 夏季特別展

発見！ れきはくの 生きものたち

2026.7.25^土-8.30^日



B



A



C



D



E



F



G

A : 乗合馬車広告(部分) 明治時代(19世紀) 当館蔵 B : ツキノワグマ(剥製) 福井県自然保護センター蔵
C : 十二神将像 子神(部分) 江戸時代 重蔵神社蔵 D : トキ「能里」(剥製) 当館蔵
E : ニホンオオカミ 頭骨 長野県上田高等学校蔵 F : 能登国採魚図絵(部分) 天保9年(1838) 当館蔵
G : 越中国魚津浦魚生写御手鑑画稿(部分) 梅田九栄(6代) 筆 天明3~4年(1783~84) 個人蔵

発見！ れきはくの 生きものたち

令和8年度
夏季特別展



プロローグ

ともに生きる困難と希望

上田市指定
天然記念物

ニホンオオカミ(頭骨) とうこつ【長野県上田高等学校蔵】

明治12年(1879)に、長野県上田市の東北方にそびえる烏帽子岳えぼしだけ山麓で捕獲されたとされるニホンオオカミの頭骨。後頭部は欠落。オオカミは18世紀以降の狂犬病拡大の影響により人への凶暴性を強めたことから駆除対象となり、20世紀初頭に絶滅した。なお、石川県では明治41年までの生息が推定できる。



古くから、人は様々な「生きもの」とちと相互に影響を及ぼしながら生きてきました。クマ問題に象徴されるように、現在、人の生活環境・行動の変化や気候変動の深刻化に伴って、生きものを含む自然との向き合い方が問われています。

本展覧会では、「人と生きもののかかわり合い」をテーマとし、当館が収蔵する歴史・民俗・美術など様々な分野の資料を、県内外に伝わった関連資料と合わせて紹介します。歴史をひもとく、人と生きものが歩んできた道をたどることで、生きものとの向き合い方の「これから」を考えます。

2026

7.25^土-8.30^日

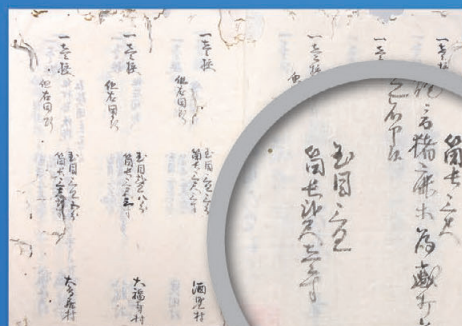
9:00-17:00 展示室への入室は16:30まで

夜間開館 7月25日(土)~8月15日(土)の金曜・土曜
9:00-19:00 (展示室への入室は18:30まで)

観覧料

- 一般 800円(640円)
 - 大学生・専門学校生 640円(510円)
 - 高校生以下無料
- ※()内は団体料金・65歳以上は団体料金
※障害者手帳・「ミライロID」ご提示の方
および付添1名は無料

※常設展および「れきはくコレクション」もあわせてご覧いただけます。



生きものが災いになるとき

てつ ぼう すう など あい ちやう り かき あげ ちやう しょう 鉄砲数等相調理書上申帳【安政2年(1855) 当館蔵】

はく い ぐん と ぎ ぐみ
羽咋郡富来組(現在の志賀町)の村々における鉄砲の所持状況を調べた記録。江戸時代には、狩人のほか、百姓についても田畑を荒らす鳥獣を追い払うためにおどしてつぼう威鉄砲を持つことが許されていた。農作物を害する獣として、イノシシとシカが代表的であった。



ニホンイノシシ(剥製)
福井県自然保護センター蔵



ニホンジカ(剥製)
福井県自然保護センター蔵





生きものから恵みを得る

石川県
指定
文化財

の との く に さい ぎょ ず え
能登国採魚図絵【天保9年(1838) 当館蔵】

能登の漁業の様子を描いた画帖に見られるように、内浦の宇出津を中心として迷い込んだクジラを捕えることがあった。クジラからは、食用となる肉や皮を得たほか、脂肪からは油が製造され、骨や筋は加工品の原料として用いられた。



労働力としての生きもの

のり あい ば しゅ こう こく
乗合馬車広告

【明治時代(19世紀) 当館蔵】

金沢市十間町にあった内国通運会社支店の乗合馬車の広告とみられる。明治初期に設立された同社は、政府の保護をうけ内陸輸送請負業を独占、全国に支店や出張所を設置し郵便物や貨物の輸送にあたった。



生きものを調べる

えっちゅうのくにうあ づ うらさかな せい しや あん て ががみ が こう
越中国魚津浦魚生写御手鑑画稿(部分)

【梅田九栄(6代) 天明3~4年(1783~84) 個人蔵】

天明3年10月から翌2月にかけて、加賀藩御用絵師・六代梅田九栄(1757~1800)は、藩命により越中国魚津に赴き、当地で捕獲された魚・甲殻類の図譜を制作した。本作はその画稿で、生きものに対する絵師の観察眼が光る。

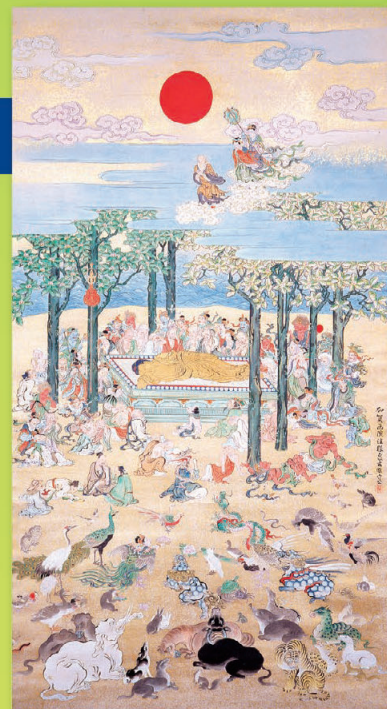


信仰世界と生きもの

ぶつ ね はん ず
仏涅槃図

【佐々木泉玄筆
江戸時代(19世紀) 当館蔵】

仏教の開祖である釈迦が亡くなる場面を描いた絵画である。横たわる釈迦のまわりには、弟子たちと同じように嘆き悲しむ様々な生きものたちが描かれている。狩野派に学んだ加賀藩御用絵師による動物描写が見どころ。



エピローグ

生きもの再生の時代

トキ保護運動ポスター【昭和34年(1959) 当館蔵】

本州におけるトキの保護運動は昭和30年(1955)頃から羽咋市在住の村本義雄氏が中心となり始まった。同氏の説得により、県も保護運動に理解をしめし、昭和34年10月に県下に保護を呼びかけるポスターを配布した。当ポスターは唯一の現存品である。

特別展の関連イベントについては裏表紙の「催し物案内」または当館ホームページ・チラシをご覧ください。

れきはく コレクション

2026 **7.25** 土 - **8.30** 日

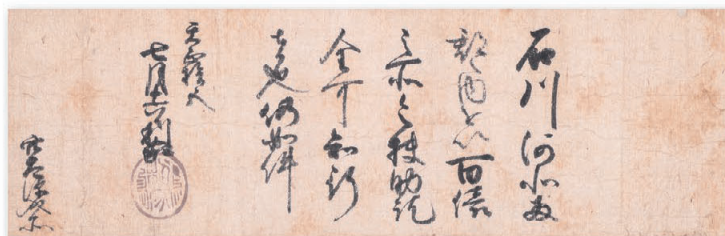
9:00-17:00 展示室への入室は16:30まで

夜間開館

7月25日(土)～8月15日(土)の金曜・土曜
9:00～19:00(展示室への入室は18:30まで)

観覧料

常設展または特別展「発見!れきはくの生きものたち」
のチケットでご覧いただけます。



前田利家知行宛行状(穴太家文書)

天正15年(1587)

石垣を作る専門技術者である「穴太」のうち、加賀前田家に登用された穴太家(奥家)に伝来した文書。天正15年(1587)に穴太源介が知行100俵を得て知行取となった。前田利家によって天正年間から文禄年間にかけて行われた金沢城の築城において、石垣普請に貢献した。



花鳥図幅

水景に梅や燕子花など春夏の花と鴛鴦や縵帯鳥などの鳥を描く。作者の狩野祐益は、加賀藩が17世紀半ばより起用してきた表絵師・神田松永町狩野家の系譜に連なる絵師。文化年間(1804～1818)の金沢城二の丸御殿再建における障壁画制作で、息子の狩野墨川(?～1835)とともに江戸から下向し、重要な役割を果たしたことで知られる。

当館では、文化財を後世に伝えていくという使命のもと、石川県の歴史・文化に関わる資料を収集しています。今回も皆様のご厚意により多くの資料をご寄附いただき、当館で購入したものを含めると計54件の資料を新たに収蔵しました。本展では近年に寄附や購入によって新たに収蔵した資料を初公開し、当館が形成してきたコレクションと関連づけて紹介します。

◆ 寄贈資料一覧 (受入順・敬称略)

資料名	点数	寄贈者
狩野祐益筆 花鳥図幅	1	(購 入)
軍楽隊記念写真	1	(購 入)
大屋小学校避難所資料 (令和6年能登半島地震関連資料)	104	輪島市教育委員会 生涯学習文化課
正院ひなん所新聞 (令和6年能登半島地震関連資料)	14	正院公民館
犬千代書状(篠島豊前守宛)	1	山田 兼道
翡翠製大珠	1	三浦 洋一
珠洲叩中麴	1	田端和樹雄
早川勇作氏関係アルバム	2	細山いつみ
澤田家関係写真	4	菅村 真隆
澤田家関係文書	5	//
穴太家文書	37	穴太 政洋
福島家関係資料	49	福島 里栄
前田綱紀知行宛行状(津田番佑宛)	1	竹村 一夫
加賀藩侍帳	1	個 人
大坂之陣関係抜書	1	//
A級戦犯揮毫書巻	1	個 人
五味武臣関係資料	841	五味 武臣
山下家関係資料	17	山下 政義
松本白華書簡写	1	個 人
斬姦状写	3	//
町名索引 附金沢市街図	3	//
第一回石川県翼賛美術展覧会目録	1	//
湯浅家関係文書	10	//
石川県関係絵葉書	4	//
軍事郵便	9	//
満蒙開拓団・満蒙開拓青少年 義勇軍関係資料	6	//
献納飛行機関係資料	6	//
大正十三年陸軍特別大演習関係資料	14	//
海外引揚関係資料	6	//
加越能維新勤王史略	1	//
昭和十二年度版 七尾町勢	1	//
温泉観光案内パンフレット	6	//
第九師団歓迎金沢駅構内入場証	3	//
石川県師範学校満鮮旅行アルバム	1	//
桑山家関係資料	65	桑山 晴夫
防空頭巾	1	米田 友和
リュックサック	1	//
狩野即筆 花鳥・名所図	2曲1隻	大場 淳二
群童遊戯図屏風	6曲1双	//
千手観音菩薩立像	2	夕日寺町町会
夕日寺観世音菩薩御縁起	1	//
夕日寺観世音菩薩講旨趣・講則・ 講金領収表	1	//
扁額「大悲閣」	1	//
御名号奉納額	1	//
俳諧奉納額	1	//
夕日寺観世音千二百年記念謡奉納額	1	//
楠公父子桜井の別れ図額	1	//
奉納提灯	1	//
大金沢市の全図	1	//
獅子具	1式	材二親和会
明治三年銭札	5	星 素子
絵葉書「大雪の金沢市街」	9	//
北陸鉄道乗車券	6	//
坂野博博関係資料	一括	坂野マスミ

特集

令和6年

Vol.10

能登半島地震によせて

『石川れきはく』では、146号（2024年4月発行）より「特集 令和6年能登半島地震によせて」の連載を行っています。151号（2025年7月発行）からは、被災地に関連した文化財を紹介し、その歴史的意義や学芸員が考えたことを発信してきました。本特集が、多くの方々が能登の文化財、ひいては被災地に関心を寄せるきっかけになれば幸いです。

レスキュー先で出会う古文書調査の足跡

◆ 学芸主任 吉田 朋生

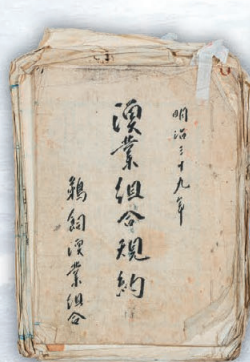
文化財レスキューで伺った個人宅で、機関名が入った封筒入りの古文書と出会うことがある。こうした公的機関に所蔵されていない歴史資料（いわゆる民間所在資料）は、所在の把握がなされ、目録等の形で記録されることが、その散逸を防ぐ重要な契機となる。であるならば、過去にどのような調査が行われてきたのかを紐解くことも必要な作業と言えるだろう。

珠洲市宝立町で出会った古文書は、未整理の状態ではあるが水産庁の封筒と共に保管されていた（画像①）。水産庁の調査として思い浮かぶのが、その委託を受けた日本常民文化研究所（常民研）が昭和24年（1949）から同30年までに行った「漁業制度資料」の収集活動である。その調査で収集された古文書の返却過程については、網野善彦『古文書返却の旅』（中央公論社、1999年）に詳しい。能登半島については、昭和26～27年（1951～52）を中心に調査が行われた。その成果は、『能登の古文書』（日本常民文化研究所、1952年）としてまとめられている。宝立町鵜飼の越後常右衛門家は、昭和27年4月4日を採集年月日とし、内容欄に「鵜飼の漁業関係の書類は全部有していたらしいが途中かなり散いつした」と記されている。

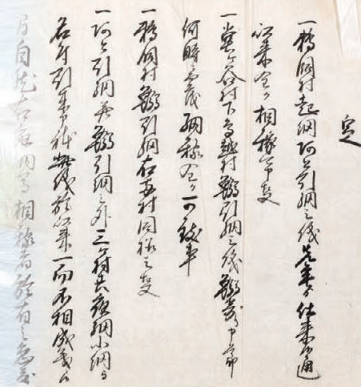
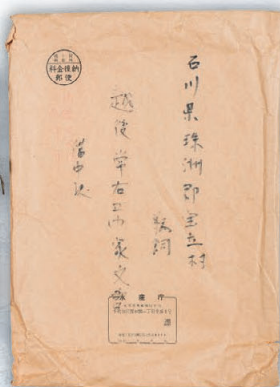
文化財レスキューで当館が確認したものは10点余りを数えるものであったが、残された各資料は貴重な情報を含んでいる。大部分が鵜飼漁業組合に関

係する近代文書で、近世文書が1点残されていた（画像②）。文化2年（1805）に鵜飼村および堂ヶ谷村・下鳥越村（現在の春日野地区）の間で鵜引網のルールを取り決めたものである。鵜飼と春日野の両地区は、明治36年（1903）の漁業免許願書に添付された「慣行事実供述書」を見ると、境界を定めず漁場を共有していたことが述べられている。そうした旧来の慣行を示すものとして、古文書が地域にとって大切な資料であることは今も変わらないが、未来への継承が課題である。以上の文書は、令和6年能登半島地震を機に改めて確認された。ご所蔵者と情報をご提供いただいた方々に感謝したい。

常民研の調査をはじめ、奥能登における古文書調査は度々行われている。その後の追跡の機会が必ずしも十分ではなかった中で、資料の所蔵者との数々のご縁をいただいた文化財レスキュー事業は、新発見のものも含む民間所在資料を把握する機会ともなった。本事業の成果を、その保存・継承に活かすための取り組みを模索している所である。



画像① 鵜飼漁業組合関係文書
および水産庁借用時封筒



画像② 鵜引網に関する定



石川県の満州移民政策に 影響を与えたのは誰か

学芸主任 齋藤 仁志

石川県は北陸のなかで最も多くの国策満州移民（満蒙開拓団・満蒙開拓青少年義勇軍）を送出した県だが、なぜ石川県から大量の移民が送出されたのかをはっきりと明らかにした研究は、管見のかぎり見当たらない。

現在、関係書籍——たとえば『石川県満蒙開拓史』（1982年）——などで主張されている仮説として、日本政府内で満州移民政策を熱心に推し進めた人々のなかに石川県と関係の深い加藤完治（農本主義者）・杉野忠夫（農学者）・永井柳太郎（代議士）の3人がおり、それをうけ石川県当局が同政策に積極的となったことが原因ではないか、というものがある。

しかし、たとえば加藤は「満州開拓の父」と呼ばれるほど同政策に強い影響を与えた人物だが、彼は東京の出身で、石川県との関係といっても金沢にあった第四高等学校で3年間学んだ程度である。同校卒業後、加藤は東京帝国大学に進み、その後山形県などで教育者として活動したが、石川県には赴任しなかった。また、杉野の場合は、自著で石川県のことを「郷里」と呼んでいるが、実は大阪市堂島の出身。幼少期に石川県出身者の養子となったが、養父は名古屋や京都のガス会社に勤めた人物で、父親の勤め先のこともあって杉野は石川県に住んだことがなかったか、あるいは住んだとしても一時的なものにすぎなかった可能性が高い。それを示すように、杉野の進学先は京都府立第一中学校・第三高等学校（京都）・東京帝大・京都帝国大学大学院と、石川県とはまったく関係がない。以上のように、両者と石川県との関係は実はかなり希薄で、彼らのために県当局が移民政策に積極的になったとは想定しがたい（なお、昭和18年（1943）、または昭和19年（1944）9月に杉野は石川県修練農場長に就任したとされるが、その頃には満州移民政策自体がほとんど破綻しており、彼の農場長就任が石川からの移民送出の大勢に大きな影響を与えたとは考えられない）。

他方、永井は金沢出身、かつ石川県の選挙区から選ばれた代議士で、明確に石川県と「深い」関係がある。また、昭和7年（1932）5月から昭和9年（1934）7月まで永井は拓務大臣——拓務省は満州移民政策を主導した省庁の1つ——を務めており、その在任中に永井の熱心な後押しもあって満州移民事業ははじまった。このような石川県との関係性や拓務大臣という立場、満州移民への積極的態度などから、永井の石川県への影響を認めようとする仮説は十分に理解できる。しかし、永井の拓務大臣在任中に、石川県がとくに積極的に移民を送出した形跡はない。たとえば、当該期間に募集・送出された満州移民は、第1次・第2次・第3次試験移民——初期の満州移民はあくまでも試験的なものだった——であるが、石川県は第1次のときは募集地に選ばれず、第2次でようやく募集地に選ばれ29人を送出、第3次では再び募集地から除外された。すなわち、永井の在任中、石川県が送出した移民は第2次の29人しかいなかったのである。もし実際に永井の「影響」があったとすると、この移民送出数の少なさはどのように説明されるのだろうか。

ここで、第2次から第6次移民までの北陸3県の満州移民への応募者数と入植者数を比較してみよう。〈附表〉をみてわかるように、第2次から第5次移民までの入植者数は、北陸3県の間でそこまで大きな違いがあったわけではない。しかし、第6次移民では3県のなかで石川県だけが唯一3桁におよぶ入植者を送出しており、石川県が入植者数において福井・富山両県を引き離す位置に突如として躍り出ることとなった。一方、応募者に注目してみると、実は第4次移民の段階で石川県では他2県に比して最大20倍もの多くの応募があったことがわかる。すなわち、第4次移民のときからすでに石川県と他2県との間には異なる動きが存在しており、それが入植者数の突出した多さとして顕在化したのが第6次移民であった、と考えられるのである。

では、第4次移民（石川県では昭和10年（1935）5月から募集開始）のときに、なぜ応募者が多かったのか。この背景としては様々な要因が考えられるが、現在筆者が注目しているのが石川県当局内の人的要因、すなわち昭和10年1月に石川県知事として赴任した生駒高常、そして同月に石川県学務部長として赴任した山口乾治の2人の存在である。生駒は石川県知事になる前は拓務省管理局長として移民行政に深く関わり、前述した加藤完治らとともに熱心に満州移民政策を推進した経歴をもっていた。くわえて、昭和12年（1937）2月に知事を退任したあとも、満州移民の支援などを行った「満州拓殖公社」（満拓）の理事に就任している。また、山口は内務官僚として地方自治に関わってきた人物だが、生駒と同時期に学務部長——当時、学務部内の社会課が移民行政を管掌していた——に着任、昭和13年（1938）4月には拓務省の書記官に任じられて転出した。以後、山口は満州開拓青年義勇隊訓練本部総務部長や満州拓殖委員会事務局長などを歴任し、満州移民政策に深く関わっていくことになる。

以上のように、石川県に赴任する前、または赴任した後に満州移民行政と深く関わる人物が2人、ちょうど第4次移民の募集が開始される前に石川県当局の中枢に存在したのである。はたして、前に述べた第4次移民の応募者数の多さと生駒らの存在は関係があったのだろうか。この問いに対して、筆者は未だ生駒県政の具体的分析を行ってないため十分に答えることはできない。しかし、前述した生駒らの経歴や在任していた時期——彼らの在任期間中の昭和11年（1936）に満州移民政策は「重要国策」とされ、翌年から本格的な移民の大量送出がはじまった——なども考慮すると、彼らが第4次移民だけでなく、石川県の満州移民行政全体に無視できない影響を与えたのではないかと筆者は疑っている。この疑いが当を得たものかどうか、引き続き調査を進めながら明らかにしたい。



生駒 高常

（『石川県史』現代篇・第1巻、646頁より転載）

〈附表〉北陸3県の満州移民応募者数・入植者数

（単位：人）

	第2次		第4次		第5次		第6次	
	応募者	入植者	応募者	入植者	応募者	入植者	応募者	入植者
福井県	70	37	6	0	11	3	33	21
石川県	49	29	60	5	66	11	307	205
富山県	54	34	3	0	20	4	62	39

※本表作成にあたっては、拓務大臣官房調査課編『昭和十二年 拓務統計』（拓務大臣官房調査課、1939年）185頁を参照。

なお、第1次・第3次移民については、3県とも募集地域から除外されたので省略した。

催し物案内 Information

各種講座などの情報をお知らせします。
※各種催し物の詳細については、当館ホームページにてお知らせします。

7月 休館日：7/22(水)～7/24(金)

- 18日(土) **れきはくゼミナール 13:30～15:00** 聴講無料／申込不要
「加賀の古墳と古代社会」
講師：三浦 俊明（当館資料課長）
- 25日(土) **夏季特別展展示解説 17:30～18:30(夜間開館)** 要観覧会チケット／申込不要

8月 休館日：8/31(月)

- 1日(土) **夏季特別展関連ワークショップ 10:00～11:30／14:00～15:30** 要参加費／要申込
「昆虫を観察してスケッチしてみよう！」
講師：石川 卓弥氏（石川県ふれあい昆虫館学芸員）
- 2日(日) **夏季特別展関連講座 13:30～15:00** 無料／要申込
「野生動物と向き合う」第1回
「ちょっと深掘り、クマの生態そして、森の変化とクマの変化」
講師：大井 徹氏（石川県立大学特任教授）

11日(火・祝) **夏季特別展展示解説 14:00～15:00** 要観覧会チケット／申込不要

20日(木) **夏季特別展展示解説 10:30～11:30** 要観覧会チケット／申込不要

22日(土) **れきはくゼミナール 13:30～15:00** 聴講無料／申込不要
「金沢のほとけたち」
講師：中井 夏帆（当館学芸員）

29日(土) **夏季特別展関連講座 13:30～15:00** 無料／要申込
「野生動物と向き合う」第2回
「魂の行方：列島開拓とケモノたち」
講師：田口 洋美氏（東北芸術工科大学名誉教授）

9月 休館日：9/1(火)、9/16(水)～9/18(金)

26日(土) **れきはくゼミナール 13:30～15:00** 聴講無料／申込不要
「祝祭行列の近代 — なぜ金沢の小学校は提灯行列をするのか —」
講師：大門 哲（当館副館長）

次回 展覧会のお知らせ

国立民族学博物館コレクション 秋季特別展 世界のかわいい衣装

令和8年(2026) 9/19(土)～11/8(日)



上着(スロバキア)
1990年収集

さまざまな気候や風土、社会や文化のなかで育まれてきた世界の衣装、その魅力は、豊かな色彩、地域独特の文様、形や着方の多岐にわたる手仕事をみることができます。生活を彩ってきた衣装は、その土地に生きる人びとの知恵や創意工夫、技術によって受け継がれ、今日まで伝えられてきています。

本展では、国立民族学博物館のコレクションから「かわいい」をキーワードに選んだ世界の衣装約120点を紹介します。これらを身につける人びとの世界に思いを馳せることで、私たちの装いを問い直す機会となるでしょう。

広告

私たち一般社団法人終活協議会が提供する心託(しんたく)サービスは、入院中の買い物や通院への付き添い、安否の見守り、入院手続き、介護施設探し、身元保証といった生前サポートから、葬儀、納骨、相続のための公正証書作成といった亡くなった後の手続きまで、すべてを一つの窓口を通じて対応しますので、生涯を通じて頼りにして頂けます。

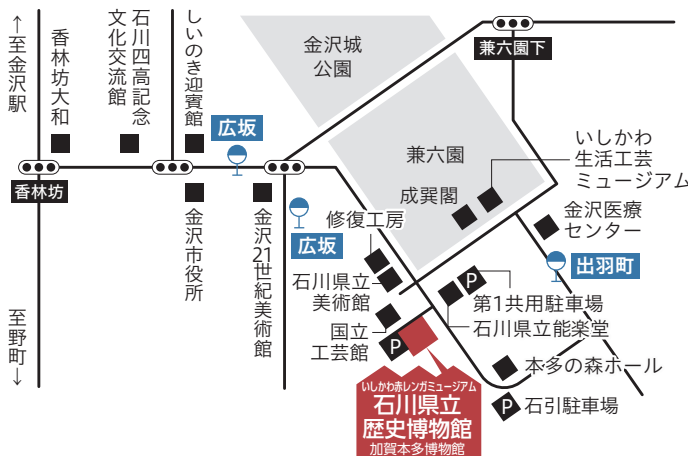
まずは、心託でお手伝い出来ることをまとめた資料をお送りします。

資料をご請求頂いた方には、終活に役立つエンディングノートも一緒にお届けしますので、ぜひ将来への準備にお役立てください。

資料請求でエンディングノートを無料プレゼント!
050-1883-0482
受付時間 10:00～17:00(年中無休)

一般社団法人 終活協議会 想いコーポレーショングループ
〒170-0002 東京都豊島区巣鴨2-11-4 第3高橋ビル11F

入会金：1万円(税込)/身元保証・死後事務などの各種サービスは、入会金とは別料金となります。※月額8年会費無料/資産開示不要。代金のお支払いは銀行へのお振り込みとなります。お振り込み手数料はお客様のご負担となります。お客様の氏名・住所などの個人情報、弊社サービスのご案内・資料のご送付以外には使用いたしません。



いしかわ赤レンガミュージアム

石川県立歴史博物館
ISHIKAWA PREFECTURAL MUSEUM OF HISTORY

〒920-0963 石川県金沢市出羽町3-1
TEL: 076-262-3236 FAX: 076-262-1836
E-mail: rekihaku@pref.ishikawa.lg.jp
https://ishikawa-rekihaku.jp/

